

装飾とかざり 18世紀後期日本の文脈からの考察

Soshoku and Kazari
- A Study in the Context of Japan at the End of the 18th Century

玉蟲敏子

はじめに

- ① 日本美術と評語「装飾的」の出会い
- ② 幕末の辞書における「装飾」と「かざり」
- ③ 江戸の都市空間における「装飾」と「かざり」——隠居大名、柳澤信鴻の眼差し
おわりに——「装飾」「かざり」から「つくり」へ

【論文要旨】

「装飾」あるいは、「装飾的」という言葉が、日本美術の特質——色彩の華やかさや平面性、また金銀彩の豊富さを意味する評語として使用され始めたのはそれほど古いことではなく、日本語の文脈においては1890年代に入ってからである。日本美術と評語「装飾的」は、1867年のパリ万国博覧会を皮切りにして、70~80年代にかけて高まったジャポニズムの時代に出会った。いっぽう、日本人自身が「装飾…」という語彙を用いて日本美術を論じた例としては、岡倉天心の「日本美術史」講義（明治23~26年、1890—1893）が早く、続いて明治31年（1898）の大村西崖の尾形光琳論が上げられる。

「装飾」という言葉は、幕末に日本で出版された堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』（1862）において“decoration”的翻訳語として採用されたが、中国の古典文献にすでに見られる言葉であり、また江戸時代においては多様な語義をもって用いられていたのであった。とりわけ、この「装飾」を始め、「かざりの文化」を構成する語群である「座敷飾」「荘厳」「飾り物」などすべてが出揃う興味深い文献に人和郡山藩の元藩主、柳澤信鴻（1724—92）が執筆した『宴遊日記』（13巻26冊、柳澤文庫）がある。本書において、「装飾」は表装や装丁の意味で使用される。「荘嚴」は、両国・回向院での開帳の飾り付け、「座敷飾」は柳澤信鴻の住居の駒込・六義園でおこなわれた俳諧の会の室礼についてそれぞれ用いられ、江戸の都市文化への文脈をもとにいたる。そして、もっとも使用頻度が高く、興味深い事象を語っているのは、「飾り物」の語である。

「飾り物」は、毎年10月に雑司が谷の鬼子母神で開催されるお会式大祭に際して飾られる「作り物」類と、同じく毎年7月に行なわれる新吉原は仲の町の灯籠飾りに多く用いられる。遊女玉菊を追悼して行なわれるようになったというこの盆灯籠の趣向は多彩であり、柳澤信鴻は年毎の出し物を詳述する。そして興味深いことには、同じ灯籠の飾りについて「飾り物」とも「作り物」とも言い替えているのである。「飾り物」と「作り物」をほぼ同義として扱うこの用例は、本書にしばしば見られる注目すべき事項であり、この日記を通して江戸の「かざりの文化」は、「作り物」あるいは「見世物」といった都市を彩る他の視覚文化につながっていることが明らかにされていくのである。